夕焼け通信 1356号　2022.6.13
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）102

木幡智恵美

新学期（4）

新しい環境に少しずつ慣れて来てはいるものの、やはりストレスを溜めているのだろう。宗矢はその後も熱を出し、保育所に迎えに行ったり、家で預かったりした。寛大、実歩と同様一歳三箇月を過ぎ、ようやく歩き出した宗矢。熱を出したあとで体がだるいのか、すぐに抱っこを求めてくるものの、じっとはしておらず、家じゅうの部屋を巡り歩いた。

疲れが出ているのは寛大も同じだった。「今度は寛大が熱を出してね。明日の土曜日、児童クラブへ行くはずだったけど、頼んでいい」と、娘から電話が入った。大型連休はざまの土曜日、実歩と宗矢を保育所へ送る前に我が家におろされた寛大は、日中熱が上がることはなく、庭でトマトの植え替えをしたり、部屋でブロックをしたりし、昼食もぺろりと食べた。

娘の職場では、交代で土曜出勤がある。休みの日は母子で我が家に来、土曜出勤の日は、私が朝早くに玉湯に行き、寛大を児童クラブまで歩いて送っていく。大型連休が明けて初めての土曜日、玉湯の家に入ると、いつもとっくに朝食を終えている寛大がまだ食べている。「土曜日は、人が少なくて遊ぶ人がいないから、児童クラブに行きたくないって大泣きして、やっと今食べ始めたとこ」と娘。寛大を見ると、目の周りが腫れている。「色々話をして、行くっていうから、送ってくれる」と娘が言う。「じゃあ公園で少し遊んでからいくか」と寛大に言うと、「うん」と言うので、娘たちを送ってしばらくしてから、家を出た。途中いつもの通学路の方へ曲がるので、「あれ、公園行かない」と聞くと、「いい」と言うので、道草しながらゆっくりと児童クラブへ向かった。

そんなことがあってしばらく経った朝早くに、娘から電話がきた。児童クラブで嫌なことがあったようで、「起きてからずっと大泣きしててねえ。こんな時、どうしたらいい？」と言う。「連絡帳に、寛大から聞いたことを書いて、それとなく様子を見てもらうようにしたら」と答えた。結局、その日は何とか学校に行き、帰って来た時は機嫌よかったようだ。けれども、それ以来、人数が少なく、嫌な思いをした相手が来る土曜日は、児童クラブを休みたいというようになった。「予定を知らせんといけんで、とりあえず六月の土曜日は児童クラブをお休みさせようと思って。寛大を預かってもらえる」との連絡を娘から受けた。

がらがら橋日記

宮森健次

ソーセージ

自分で作れるとは六十一年間一度も思ったことのないソーセージ（サルシッチャ）が思いのほか簡単にできることを知った。もちろん、一定の品質など求めれば、とんでもなく難しいことになるのだろうが、自分で作って食べる分には、どんな味になろうと構わないのが強みだ。むしろ作る度にできるだけ味が違っていた方が楽しい。

カルミネ・アバーテの小説に出てくる料理上手の面々にとっては、もちろんそんないい加減な態度は論外で、日常の食卓を飾るそれが至宝のごとく描かれている。決して豊かではない、歴史的にも抑圧され続けた人たちが、ありふれた料理で究極の味を得ているというのは、読んでいて胸が熱くなるものがある。

興が乗って、関連図書をいくつか読んでみた。中世ヨーロッパの身分社会は、食をも階層化していて、鳥獣を狩ってその生肉を食すのは貴族の権利だった。肉を焼いて食べるなんて貴族の特権で、農民たちはそもそも生肉を食す機会さえなかった。冬の間に屠った豚肉を塩漬けにし、それを一年かけてちびちびと食べるのだ。その保存食の一つがサルシッチャ、ソーセージということらしい。だから、余すところなく食すために茹でる煮るを基本とした調理法なのだ。

だが、おもしろいことに焼いた肉を食せぬ農民たちを見下していたはずの貴族が、やがて農民食に手を広げていくようになる。つまり、農民たちの方がうまいものを食していたのだ。日本の食文化についても似たような話を聞いたことがある。いつだって人はうまいものが食べたいのであり、なければないなりに工夫を凝らすのだ。その方がずっと画期的だったりする。

半世紀近くも前のことになったが、一度だけ天神祭のアルバイトをやった。得体の知れない痩身の中年男と露店でソーセージを売った。段ボールに詰められた初めから串の刺さった冷凍のそれを水を張ったバケツに放り込み、溶けたのから衣を付けて油で揚げる。夜になって浴衣をまとった大勢の人で埋まり、ぼくらの店の前にまで押し出されるようになると、それで弾みが付くのか飛ぶように売れた。バケツの水を替えに行く暇もなくなって、油と埃でドロドロになっていった。ぼくの隣でひたすら揚げている男は、もともと無口なふうだったのが忙しさでますます黙ったままだ。でも、客足ががほんの少し途切れたとき、ぼくの足下のバケツをチラッと見て、

「ようこんなもん喰うわ。」

と言ってニヤッと笑った。ぼくも笑った。試してみてもよかったけど、結局最後まで口にしなかった。ソーセージの中身は、肉屋と神様しか知らない。

30代フリーター　やあ、ジイさん。ウクライナが軍事大国のロシアに負けない強さを発揮している。

年金生活者　政体が民主制であることが大きな要因のひとつとなっている。独裁国家だったアフガニスタンやイラクが、アメリカに攻め込まれると、あっけなく崩壊したことを思い起こせば納得がいくはずだ。独裁者は国家を自らの所有物のように考えているので、自分の命が危なくなれば国家を捨てる。イラクの大統領だったサダム・フセインは首都が陥落する前に逃亡した。アフガニスタンの首長だったムハンマド・オマルは開戦当初、政府施設ではなく自宅にいた。アメリカは民間人の被害を恐れて空爆をやめ、彼の逃亡を許したとされる。

30代　ゼレンスキーは彼らと対照的な行動をとり続けている。

年金　民主的な選挙で選ばれた大統領だからだ。国家は国民のものであり、大統領の所有物ではない。大統領はその運営を任された国民のしもべであり、独裁者のように勝手に国家を捨てることは許されない。ウクライナを自分たちの国家と考える国民は、だからこそ自分たちの手で守ることを決意し、ゼレンスキーにその先頭に立つことを求めた。

　独裁国家の国民には国家が自分たちのものであるという意識が民主主義国の国民ほど強くない。だから、戦争をすれば民主主義国のほうが強い。市民革命のあとナポレオンに率いられたフランスが周辺国との戦争に勝ち続けたのも、イギリスやアメリカが覇権国家になったのも、民主主義を政体に採用したことが大きな要因だ。

30代　そう考えると、ロシアが戦争を継続できているのが逆に不思議に思えてくる。

年金　その理由を考えると、やはりプーチンの支持率の高さに行き着く。

　ロシアの独立系世論調査機関「レバダ・センター」が4月下旬に実施した世論調査では、プーチンの支持率は82％にのぼっている。民主主義国のトップがこれほどの支持率を獲得するのは、よほど特殊な状況でないと起きない。9・11テロ直後のブッシュの支持率が91％に跳ね上がったのがそれに該当する。彼はそのあと一時19％まで支持率を落としている。

　これに対して、プーチンは低いときでも60％程度を維持しており、国民の支持は安定していると見ることができる。なぜなのか。その支持率は初めから下駄を履かせられているからだ。これは調査や集計に操作が加えられているという意味ではない。「下駄」とは政策や政権運営への評価とは別の特性への評価を指す。すなわち「ロシア帝国のツァーリ」としてのプーチンの権威に対する評価だ。

30代　現在のロシアは帝政ではない。

年金　ないけれど、帝国の伝統をいまなお引きずっている。ウクライナを対等な主権国家ではなく、自らに服属する臣下のように扱い、言いなりにならないと軍事力を行使するという前近代的な振る舞いにそれがあらわれている。

　ロシア国民の大多数はプーチンを、ソ連崩壊後の廃墟からこの国をふたたび立ち上がらせ、国民の生活を安定させた善きツァーリとして支持している。ウクライナで現政権に虐げられているロシア人を救うための軍事作戦だと宣伝されれば、そう信じてしまう。

　そんな「帝政」が倒れるときあるとすれば、第1次世界大戦で国民生活が破壊され、革命にまで至ったときのような事態が到来したときが考えられる。だが、その可能性はいまない。西側諸国による大規模な経済制裁はロシア国民の生活を窮地に追い込むところまでは至っていないし、今後もその可能性は低い。消耗戦はこの先もなお続くと見なければならない。

30代　光はどこにも見えないのか。

年金　長谷川慶太郎は、世界経済をインフレ基調にするのは戦争であり、デフレに導くのが平和だと指摘した。東西冷戦のあいだはインフレが続いた。それが終わったとたんにデフレに転じた。戦争は国家による膨大な財政支出を不可避にする。東西冷戦では、軍備への支出ばかりではなく、社会保障を中心とした支出が両陣営の間で競われた。

　その冷戦の終結で、国家による財政支出が喚起していた需要は縮小し、敗北した東側諸国からは安い労働力が世界市場に流れ込んで、世界経済の基調はインフレからデフレに転換した。それは絶えざるイノベーションを企業に迫り、富の稀少性の縮減を加速した。

　そんな時代の流れのなかでいきなりロシアのウクライナ侵略が始まった。それはウクライナ領内での「流血の戦争」だけでなく、経済制裁を武器とした世界規模の「無血の戦争」を引き起こした。それは一気にエネルギー価格の高騰を招き、世界各国の諸物価を急上昇させた。世界経済はデフレからインフレに再転換した。

　ロシアの侵略戦争は長期化の様相を見せているうえ、戦争が終わってからも、復興需要の増大でインフレはかなりの期間にわたって続くだろう。しかし、永遠に続くことはあり得ない。需要がひととおり満たされれば、振り子が反対に振れるように、供給過剰が訪れる。イノベーションの競争が激化する。希望的観測を言うなら、そのときこそ富の稀少性の縮減がもう一段ギアを上げて進むだろう。

ニュース日記　834

中村　礼治

戦争のゆくえ、戦後のゆくえ